

二つの目的語をもつ上代語の構文

―助詞「を」の機能―

論文要旨

一つの他動詞が二つの目的語をもつ、いわゆる「二重ヲ格」の構文は、中古から近世までかなり詳細に調査され、考察されてきている。しかし、『古事記』『日本書紀』『萬葉集』などの上代の文献については、ほとんど未開拓であり、その特徴が明らかにされていない。

本稿ではその欠を補うべく上代の文献を徹底的に調査したうえで、多くの実例に考察を加え、上代では二つの目的語のうち第一の目的語だけが助詞「を」を伴い、第二の目的語はそれを伴わないという特徴が認められることを明らかにする。上代の場合は「二重ヲ格」という呼称は不適切であり、「二重目的語構文」とでも呼ぶべきものである。「二重目的語構文」として認定するのに困難を伴う例があるが、本稿ではそのような例の一つ一つに検討を加え、問題の解決に努める。また、「二重目的語構文」に現れる「を」と「に」との関係についても、多くの例を挙示しながら私見を述べる。

キーワード【上代語、二重ヲ格、目的語、助詞ヲ、意味的一体化】

1

いわゆる「二重ヲ格」の表現は、現代語の研究者によって取り上げられ論じられることが多い。しかし、過去の文献を見わたす限りでは、「二重ヲ格」に類する表現は日本語の歴史を通じてどの時代にもあったと言えそうである⁽¹⁾。

本稿の筆者は、「二重ヲ格」およびそれに近い表現をめぐって上代の文献を細かく調査し、その結果を報告したことがある⁽²⁾。上代語に特徴的に認められるのは、後世の「二重ヲ格」とはやや異なる形態をもつもので、「二重目的語構文」あるいは「複目的語構文」とでも呼ぶべき構文である。つまり、一つの他動詞が二つの目的語をもちながら、第一の目的語だけに「を」が付き、第二の目的語にはそれが付かない、という形式の構文である。

佐 佐 木 隆

二つの目的語をもつ構文は、第一の目的語と第二の目的語との関係はどのようなものか、という視点から、

I 第一の目的語を言い換えたものが第二の目的語である場合

II 第一の目的語と第二の目的語がまったく別のものである場合

の二種に大別しう。I の構文は、ひとまず第一の目的語を提示したあとで、それを別の側面に注目して言い換えたものを第二の目的語として提示する、というかたちになっている。だから、これは「目的語を細説する構文」と呼ぶことができる。

二種の構文に属する実例は、用語を厳選するとともに表現の構成にも細心の注意をはらったはずの歌に、少なからず認められる。この点から、それらの実例は、歌の作者が不注意によつてたまたま非文法的な表現を構成してしまったものだ、と見ることはできない。作者が、当時用いられていた一般的な技法に従つて構成した表現だ、と考えられる。

二種の構文に関して、ほぼ以上のようなことが確認できる。本稿では、前稿で言及しえなかった、同構文をめぐるいくつかの事実に考察を加える。また、特定の例が同構文に属するものかどうかを判断する際に生じる、回避しえない根本的な問題についても、具体的に例を挙げて私見を述べる。

2

一つの他動詞が二つの目的語をもつ I・II の構文がどのようなものであるかを確認するために、まずそれぞれの実例を具体的に見ておく。

第一の目的語を言い換えたものが第二の目的語になっているという、I の構文に属する代表的な実例としてとりあえず次の三例を取り上げ、その表現の内容を確認する【一】内に半角の漢数字で巻数・歌番号のみを示してあるのは、すべて『萬葉集』から引用したものである】。

- 1 いとのきて みじかきものを 短物乎 端伎流等 はじきると 云へるが如く 楚取る しもと
 - 里長が声は さとさか 寝屋処まで 来立ち呼ばひぬ ねやど 【五・八三】
 - 2 佐保河乎 さほがほを 朝河渡 あさかはわたり 春日野を 背向に見つ そむひ あしひきの
 - 山辺をさして やまべ 晩闇と 隠りましぬれ ゆふやみ 【三・四六】
 - 3 神風の 伊勢の 伊勢の野の 娑柯曳鳴 かむかぜ さかえを 伊哀甫流柯枳底 いほふる いかきて
- 其が尽くるまでに 大君に 堅く かた 仕へ奉らむと こころ 【紀六】

1 の「いとのかきて短き物を端切る」は、「ひどい状況に、またひどい状況が重なる」という意味の諺を引用したものである。「いとのかきて」を除く部分は「短き物を、端（を）切る」の意であり、他

動詞の「切る」は「短き物を」と「端（を）」の二つの目的語をもっている。また、この例では、第一の目的語である「短き物を」を言い換えたと言えるのが、第二の目的語にあたる「端（を）」である。第二の目的語として「端（を）」を提示することによって、「切る」という行為・作用が直接に及ぶ部分を、具体的かつ補足的に説明したわけである。「端」は「短き物」の一部をなすから、両者の関係に変形を加えて「短き物の端（を）切る」と言い換えると、構文のありかたは異なってくるが、描写する事態の内容に変化は生じない。

2の表現は、尼の死を悲嘆して詠んだ長歌の一部である。「佐保河を朝河渡り」では、初めに「佐保河」と言って提示した目的語をすぐに「朝河」と具体的に言い換え、それを再提示した形式になっている。つまり、「朝河」とは、朝という特定の時間帯における「佐保河」のことであり、ここは「佐保河を、朝河（を）渡り」の意である。「朝河渡り」は当時の葬儀が早朝に行われていたことを反映するものだ、と言われる。この歌で、第一の目的語である「佐保河」をあえて「朝河」と言い換え、それを第二の目的語として再提示したのは、尼が死んだことを示すとともにその葬儀の一面面を描写するためだろう。同歌の左注には、「屍柩を葬（はな）送ること既に訖（は）りぬ」とある。

「朝河渡る」という表現はほかに『萬葉集』に三例あるが、それらはどれも「朝に、河を渡る」の意ではなく「朝の河を渡る」の意

で用いられている。「朝宮を……、夕宮を……」（三・二六）や「朝廷に……、夕庭に……」（古・元君）などの例のように、同じものや同じ場所を時間帯によって「朝」「夕」と呼び分けるのは、当時の一つの表現技法である。「佐保河」と「朝河」は同じ河をさすから、くどい表現にはなるが、やはり「佐保河の朝河（を）渡り」と言い換えることができる。

3の「伊勢の野の栄枝を五百経る懸きて」は、「伊勢の野の、（多くの葉が繁茂して）栄えている（木の）枝を、五百年も経つのを吊り下げて」の意である。連体形準体句を含む「五百経る」は誇張した表現だが、聖なる木の「栄枝を」、それも「五百経る」ほどの古くめでたい枝を「懸きて」と述べることによって、天皇の繁栄を祈るとともに自らの忠誠心を表明したのである。「栄枝」を具体的かつ補足的に言い換えたものが「五百経る」だから、ここは「栄枝を、五百経る（を）懸きて」の意である。これもまた、「栄枝の五百経る（を）懸きて」と言い換えることができる。

以上の実例では、第一の目的語だけが「…を」という形式で提示され、第二の目的語は無助詞のままで提示されている。

二つの目的語がまったく別のものになっている、Ⅱの構文に属する代表的な実例として、やはり三例をあげる。

4 大坂に 阿布夜衰登売衰 美知斗閉婆 直には告らず 当芸
麻道を告る
〔記七七〕

5 ほととぎす 夜喧きをしつつ 和我世児乎 安宿勿令寐
め情あれ (十九・四七九)

6 草枕 客去君乎 人目多み 袖不振為而 あまた悔しも
(十三・三八四)

4の「大坂に遇ふや嬢子を道問へば」という表現の「道問へば」は、言うまでもなく「道(を)問へば」の意である。そのことは、「夕ト乎問ふと」(十一・三六五)や「名矣問へど」(十三・三三九)などの例を見ればよくわかる。また、上代語では、「吾鳥問はすな」(紀三)や「夜渡る吾乎問ふ人や誰」(十一・三四〇)などの例でも明らかのように、「問ふ」の対象が人物である場合には、「(人)に問ふ」ではなく「(人)を問ふ」と表現した。「石木乎も問ひ放け知らず」(五・五八四)は、「石木」を擬人化した表現である。人にものごとを尋ねる時には、「(人)を(ものごと)を問ふ」と言ったようである。ほかの「問ふ」の用例から判断して、「道問ふ」が意味的に密接に結合して一体化していたとは想定できないから、4の構文は「嬢子を、道(を)問へば」というようなものであり、他動詞の「問ふ」が「嬢子を」と「道(を)」の二つの目的語をもつ表現だと解するしかない。第一の目的語である「嬢子」には「を」が付いているが、第二の目的語である「道」にはそれが付いていない。

5の「我が背子を安眠な寝しめ」も、同種の構文に属する例である。「眠を寝ず(伊乎祢受)居れば」(二十・四〇〇)や「寢宿金鶴」(十

三・三九三)などの例があり、また動詞「寝」の敬語「寝す」を用いた「眠をし寝せ(伊遠斯那世)」(記五)という例があることでもわかるように、上代語には「寝ること／睡眠」の意を表す「眠」という名詞があった。「朝眠」「味眠」「夜眠」などの複合語も用いられた。上代だけでなく後世にもよく用いられた「寝ぬ」という動詞は、名詞の「眠」と「寝」とが複合したものであり、もともと「眠(を)寝」という構成のものであった。

5に見える「安眠」とは、文字どおり「安らかな眠り」の意である。それを含む「我が背子を安眠な寝しめ」は、その直前に置かれた長歌に「安眠寝しめず君を悩ませ(安寐不令宿君乎。奈夜麻勢)」(十九・四七九)とあるのとはほぼ同意で、「吾が背子を、安眠(を)な寝しめ」の意である。「我が背子を」と「安眠(を)」の二つが「な寝しめ」の目的語なのだが、前者には「を」があり後者にはそれが無い。

6の「旅行く君を」が、意味的に、一句を隔てたさきの「袖振らずして」にかかるものであることは、

7 白たへの 袖はまゆひぬ 我妹子が 家の辺り乎 止まず振
りしに (十一・三六九)

という歌の「家の辺りを止まず振りしに」を見れば明らかである。

「旅行く君を」の「君を」は、たびたび指摘されるように「君に

対して「君に向かつて」という口訳があてはまる格助詞である。第三句の「人目多み」は理由を示す挿入句だと見てよいものだから、これを除去して考えると、第二句・第四句は「旅行く君を、袖(を) 振らずして」というような意味の表現となる。「君を」と「袖(を)」の二つが「振りし」の目的語にあたるわけだが、第一の目的語には「を」が付き、第二のそれは無助詞のままである。

Ⅱの構文に属する右の三例では、第一の目的語と第二のそれがまったく別のものだから、Ⅰの構文に属する諸例とは異なつて、第一の目的語に付いている「を」を「の」に変えることはできない。たとえば、4の「嬢子(を) 道(を) 問へば」を「嬢子の道(を) 問へば」と変形したり、5の「我が背子を、安眠(を) な寝しめ」を「吾が背子の安眠(を) な寝しめ」と変形したりすれば、文脈がひどく奇妙なものになってしまう。4の「道」は「嬢子」の一部ではなく、5の「安眠」も「我が背子」の一部ではないからである。

6の「旅行く君を、袖(を) 振らずして」を「旅行く君の袖(を) 振らずして」と変形することは、一見ただけでは可能であるように思われる。しかし、実際にそれは不可能である。第二の目的語である「袖」は、第一の目的語である「君」のそれではなく、作者自身が着ているものの「袖」だからである。「を」を「の」に変えると、「旅行く君の袖(を、私が) 振らずして」という奇妙な文脈になる。

3

右では、Ⅰの構文に属する実例とⅡの構文に属する実例とを、とりあえず三例ずつ見てみた。しかし、どちらの構文にもまだ確実な例がある【二つの目的語の関係は、細かく見てみると実際にさまである。だから、個々の例がⅠ・Ⅱのどちらの構文に属する例なのかを判断することは、時には必ずしも容易ではない】。

前者に属するものには次の諸例があり、個々の表現について前稿でひととおり検討した。⁽³⁾

- 8 櫟井の 和邇佐能邇袁 端土は 膚赤らけみ 底土は 黒
き故 三栗の 曾能那迦都邇袁 頭衝く 真火には当てず 眉
画き 此に画き垂れ 逢はしし女： (記四三)
- 9 道の尻 古波陀袁登売袁 雷の如 聞えしかども 阿比麻久
良麻久 (記四五)
- 10 朝妻の 避介能烏瑳介烏 片泣きに 瀾致喩區茂能茂 偶ひ
てぞ良き (記五〇)
- 11 念へこそ 歳八年乎 斬髪 与知子乎 過 橘の 末枝乎 須
具里 この川の 下にも長く 汝が心待て (三・三〇九)
- 12 あしひきの この片山の 毛武尔礼乎 五百枝波伎垂 天照
るや 日の異に干し さひづるや： (六・三六六)

また、後者に属するものには、

13 紫草は 根をかも終ふる 人の児の 宇良我奈之家乎 祢乎
遠敵奈久尔

14 氏河乎 船令渡呼跡 喚ばへども 聞えずあらし 櫂の音も
せす

15 処女等乎 袖振山 瑞垣の 久しき時ゆ 念ひけり吾は
む

16 石上 振之早田乎 秀でずとも 縄谷延与 守りつつ居ら
む

17 相念はぬ 妹哉本名 菅の根の 長春日乎 念晩牟
〔七・三三三〕

〔十・二九四〕

などの諸例がある。これらの表現のありかたについても、同じく前稿で一つずつ検討した。

ところで、もともとⅡの構文に属する例でありながら、第二の目的語とそれに続く他動詞とが、無助詞のままで意味的に融合し一体化していた可能性が想定されるものとして、

18 秋の田の 穂田の苅りばか か寄り合はば そこもか人の
吾乎言将成

〔四・五三〕

19 たたなづく 青垣山の 隔りなば 数君乎 言不問可聞
〔七・三八七〕

の二例を前稿にあげておいた。

18には、「言成す」という表現が用いられている。「言ナスは言ヲナスこと」だと解説する注釈があるように、もともと「言」は「成す」の目的語であり、「言（を）成す」の意だったはずである。しかし、18の歌が読まれた時期には、「言」と「成す」とが意味的に密接に結びついて一体化していた可能性がある。そう考えるのは、「言成す」が『萬葉集』に五例あり、うち四例が「言を成す」という表現になっている、間に「を」が割り込んだ「言を成す」という表現はないからである。「言成す」が一語化して「噂する」という意味を表すものになっていたとすれば、18の歌が二つの目的語をもつ構文の例だとは、単純に言えなくなる。つまり、もと第二の目的語だった「言」から目的語としてのニュアンスがほとんど失われていれば、「言」を目的語と呼ぶことはできないからである。

このことを、現代語に例をとって見てみる。たとえば、「その問題を片を付ける」はくどくて不自然な文だが、これを「その問題を片づける」とすれば普通の文になる。「片づける」が意味的に一体化・一語化した結果、「片」には目的語としてのニュアンスが感じられなくなっているからである。初めの「を」の代わりに「に」を用いて、「その問題に片を付ける」とすることも可能だが、それが

可能なのは結果的に「を」の重複を避けることになるからだろう。また、「古文書を紐を解く」は不自然な文だが、「古文書を繙く」とすれば不自然な文ではなくなる。「紐(を)解く」の意で接続していた「紐解く」の二語に意味的な一体化・抽象化が生じ、「紐」は目的語だという意識がなくなっているからである。さらに、もと「戸(を)閉す」の意で接続していた「戸閉す」の二語が意味的に一体化した結果、現代語では「堅く門を閉ざす」のように、「…を閉ざす」というかたちで用いられる。

第二の目的語と他動詞とが複合し、同じような文法的・意味的な現象を呈する類例は、ほかに「名づける」「氣遣う」「夢見る」その他多くある。意味的な一体化・抽象化の程度・内容は、右にあげた例でも明らかなように複合語によってさまざまである。

19の歌には、「言問ふ」という表現が用いられている。もとは「言(を)問ふ」の意だったろうが、「言問ふ」で既に一体化していたとすれば、「言」は目的語でなくなっていたはずである。ただし、19のように「…を言問ふ」と言ったものとしては、ほかに、

20 はしきよし 和我世乃伎美乎 朝去らず 逢ひて許登騰比…
〔十七・四〇六〕

の一例が『萬葉集』に見えるのみである。それとは別に、「明日去きて於妹言問」〔四・五三四〕や「吾妻尔他毛言問」〔九・二七五〕や「吾妹

児尔言問麻思乎」〔五・三三四〕などのような「…に言問ふ」が、六例ある。

20の例は、古語や古い表現を好んで用いる大伴家持の歌である。また、「問ふ」は「…を問ふ」となるのが当時の語法だから、19・20は本来の表現である。「…を問ふ」から「…に問ふ」へと、用法が時代的に変化した可能性がある【その変化の一要因として、不自然な文である「その問題を片を付ける」を「その問題に片を付ける」とすれば不自然でなくなるのと同じような理由が想定できるかも知れない】。

19の「君を言問はじかも」と同じく「問ふ」を用いた「妻問ふ」も、もと「妻(を)問ふ」の意だったろう。しかし、やはり既に一体化していた可能性が大きい。

21 秋芽子乎 妻問鹿許曾 一人子に 子持てりと言へ…
〔九・二七五〕

『萬葉集』に「妻問ふ」は七例あるが、「…を妻問ふ」の例は21しかない。「…に妻問ふ」と表現した例は見えない。一方、「妻問」という複合名詞は七例ある。「妻問ふ」に意味的な一体化が早くから起こっていたのだろう。

意味的な一体化ということは、「標刺す」「目離る」「矢作ぐ」などの語結合についても想定できる。

勿謹なづめ

〔七・二三〕

22 我が屋外やどに 殖うゑ生おほしたる 秋芽あきはぎ子を乎 誰たれかしめ標刺めさ 吾われに知ら

えず

〔十・二四〕

23 佐保過ぎて 奈良のたむけに 置く幣ぬさは 妹いも乎目め不な離れず 相見

しめとそ

〔三・三〇〕

24 淡海あふみのや 八橋やばせ乃の小竹しの乎 不造やはがず笑て而 信まこと有り得めや 恋し

きものを

〔七・三五〕

これらの語結合は、もとは「標(を)刺す」「目(を)離る」「矢(を)作ぐ」の意だったろうが、右の歌が詠まれた時期に、既に無助詞のままで一体化していた可能性がある。そうであれば、どれも単純に二つの目的語をとる構文の例だとは言えないはずである。一例ずつ見てみる。

22 の「秋芽あきはぎ子をを誰たれかしめか標刺めさす」に見える「標刺す」が、無助詞のままで一語化していた可能性は十分にある。それは、ほかに『萬葉集』に「標刺す」が二例あり、「苅り標刺す」が一例あるのに、助詞を用いて「標を刺す」と言った例が見えないからである。ただし、「標しむ」という動詞を用いた「三島江の玉江の薦こも乎を從標しめ之」〔七・三四〕では、「薦を標む」と表現している。

「標」に「刺す」ではなく「結ゆふ」を用いた、

25 人こそは おほにも言はめ 我が幾許こゝだ 師努布川原しのふかはら乎 標結しめゆふ

の「しのふ川原を、標結ふなゆめ」についても、「標結ふ」の一体化が想定できる。さらにまた、次の「浅茅標結しめゆふひ」にもその可能性がある。

26 春日野はるの尔に 浅茅あさぎ標結しめゆふ 断えめやと 吾が念ふ人をは いや遠長とほなが

〔十・三〇〕

これの第一句に「春日野に」とあり、25 に「偲ふ川原を」とある以上、これの第一句・第二句は「春日野に浅茅(を)標結ひ」の意だと考えるべきだろう。広い場所をさす「野」については「に」を用い、「標結ふ」という動作の直接の対象には「を」を用いたのだろう、ということが一般的には想定できる。しかし、『萬葉集』に二十余ある「標」の用例には、「を」を用いて「標を…」とした表現は一例もない。「標結ふ」が無助詞のままで固定してしまった時期が、かなり早かったのだろう。

23 の「妹を目離めはなれず」は、「…を離る」と表現した「妹が手本たもと乎加流か類るこの頃」〔十・三六八〕の例を見ると、もとは「妹を、目(を)離れず」の意だと解される。しかし、「目」について「離る」と言った、『萬葉集』に見える四例は、どれも無助詞である。「目離る」で一体化していたのだろう。

24の「八橋やばせの篠しのを矢造やはぎがずて」も、もとに戻せば「八橋の篠を、矢や（を）造はぎがずて」の意だろう。しかし、古くから「矢作部やはぎべ」という品部もあつたように、「矢作やぐ」で一体化していた可能性が大きい。

他動詞と第二の目的語が意味的に一体化していた可能性のある例は、Ⅱの構文に属する類例に含まれてはいるが、Ⅰの「目的語を細説する構文」に属する諸例のなかにはほとんど含まれていない。唯一の例外となるのは、

27 大夫ますらをは 御み獨かりに立たし 未通をとめ女をらは 赤裳あかもす須素引そびく 清きよき浜はまび
を

〔六・二〇二〕

の「赤裳裾（す）引く」である。⁽⁵⁾この表現の構文は、もとに戻せば「赤裳（を）、裾（を）引く」の意だと思われる。二つの目的語のどちらにも「を」が付いていないが、それは「赤裳」と「裾引く」とを一句のなかに収めたためであり、音数律の制約によるものだろう。「裾」は「赤裳」の一部だから、「赤裳の裾（を）引く」と言い換えられる。しかし、『萬葉集』に八例ある、「裾」に対して「引く」を用いた表現のなかに、「裾を…」の例が一つもない。これも、早くに無助詞のままで一体化していた可能性がある。

一体化の想定される例がⅠの構文に属する表現にほとんどないのは、単なる偶然にすぎないのか、何か背景があつてのことなのか、

現在の段階では不明である。

4

ある表現がⅠ・Ⅱの構文に属する例なのかどうかを判断する場合に、どうしても問題となるのが何点かある。それは、上代語の「を」の用法が後世のそれに比べて多様であり、個々の用例の分類・処理にとまどうことがある、という状況による。

たとえば、実際に「を」が〈乎〉〈矣〉などによつて明記されており、文脈から見てもそれは目的格の「を」だと解されている例ではあつても、上代語の「を」が多様な様態を示すことを考慮すると、「を」が付いたその体言は本当に目的語として用いられたものだと断定できるのか、といった疑問・不安が残ることもある。まして、目的語として用いられていると解される体言に「を」が付いていない場合には、そのような疑問・不安が増大する。用法はこのようなものだ、と認定しうる明確な基準がないのである。

例を一つあげる。

28 天地あめつちの 分れし時ときゆ 神さびて 高く貴たかき 駿河ふじなる 布士ふじ
能高嶺のたかね乎 天原あまのはら 振り放さけ見れば 渡る日の 影も隠ひそらひ
照る月の 光も見えず…

〔三・三七〕

これの「富士の高嶺を天の原振り放け見れば」という表現について、参考までに何種かの注釈を見てみると、「富士の高嶺を、大空はるかに振り仰いで見ると」というような口訳が付してある。しかし、構文を追究する立場からすると、「大空はるかに」と口訳された「天の原」は、文中でどのような機能を果たしているものなのか、ということが問題となる。「大空はるかに」はそれなりに工夫された意訳にはなっているが、この意訳では文中の構文的な機能がわからないのである。

「富士の高嶺を」は、目的語として「振り放け見れば」にかかると解するしかない。それに続く「天の原」には「を」がないが、これもまた、「天の原振り放け見れば」とある次のような例を参考にすれば、目的語として「振り放け見れば」にかかると思われるしかない。

- 29 天原 振り放け見れば 大王の 御寿は長く 天足らしたり
〔三・四七〕

「天の原振り放け見れば」という条件句は『萬葉集』に七例あるが、どれも「天の原（を）振り放け見れば」の意になっている。それ以外の解釈は提示されていない。また、七例を除く「振り放け見る」は『萬葉集』に二十三例あり、うち七例が「その山乎。振り放け見つ」〔三・五〕や「大殿矣。振り放け見れば」〔三・三三四〕のように、

「を」を伴うかたちで用いられた表現である。「を」を伴わない諸例の文脈でも、「振り放け見る」は何らかの語を目的語として承けている。だから、28の「天の原」も「振り放け見れば」の目的語になっている、とひとまずは解される。

このように、28の表現では「富士の高嶺を」だけでなく「天の原」もまた目的語になっていると解されるから、その文脈は、「富士の高嶺を、天の原（を）振り放け見れば」のようなものだろう。したがって、これはⅡの構文に属する例である。

ここまでは、構文の認定に大きい問題はないと考える。しかし、右の二首と同じく「天の原」を詠み込んだ次の歌については、「天の原」の用法に対する判断が困難だけでなく、同歌はⅡの構文に属する一例だとする判断も揺れてしまう。

- 30 山のはの ささらえ壮士 天原 門渡光 見らくし好しも
〔五・九三〕

この歌では、「天の原」を、「門（を）渡る」の意である「門渡る」が承けており、その「門渡る」は「海峡を渡る」の意である。第三句く第五句に対する注釈の口訳は、「天の原を渡って行く光を見るのはよいものだ」というようになっており、第三句の「天の原」も目的語として「門渡る」にかかると思われていることがわかる。これが妥当な理解であれば、第三句・第四句はもとも「天の

原(を)、門(を) 渡る光」の意で、これもⅡの構文に属する表現の一例となる。同時に、「門渡る」が既出の諸例のように意味的に一体化していた可能性も想定できる。しかし、同じく「門渡る」を含む次の二例を見れば、その可能性は低くなる。

31 淡路嶋 刀和多流船乃 梶間にも 吾は忘れず 家をしそ思ふ
〔七・三九四〕

32 奥つ国 うしはく君が 塗り屋形 黄漆乃屋形 神之門渡
〔七・三八八〕

31の第一句・第二句の「淡路島門渡る船の」は、注釈では「淡路島の海峡を渡る船の」というように口訳されている。つまり、30の「天の原門渡る光」では、「天の原」が目的格として「天の原を」と口訳されているのに対して、それとほぼ同じ構文をもつ31の「淡路島門渡る船の」では、「淡路島」が「門」にかかる連体格として、「淡路島の」と口訳されているのである。このような解釈を支持するのが、32の第五句の「神が門渡る」である。これは「神の海峡を渡る」の意であり、「神が」が連体格となつて「門」にかかつている。

31の「淡路島門渡る船の」が、「淡路島の門(を) 渡る船の」の意であれば、30の「天の原」も「天の原(を)」の意でなく「天の原(の)」の意だと解釈すべき可能性は否定できなくなる。当然の

ことながら、30の「天の原門渡る光」を、Ⅱの構文に属する一例だと認定することもできなくなるのである。

このように、「を」がない体言に対する構文的な判断に困難をきわめる場合があり、文脈の把握には十分に慎重を期する必要がある。前稿にも引用したものに、次のような例がある。

33 向つ丘の 若楓木 下枝取り 花待ついに 嘆きつるかも
〔七・二五九〕

34 恋しければ 来ませ我が背子 可伎都楊疑 宇礼都美可良思
〔十四・三四五〕

吾立ち待たむ
〔十四・三四五〕

35 天漢 夜船傍而 明けぬとも 相はむと念ふ夜 袖交へず
あらむ
〔十・二〇一〇〕

33の「若楓の木、下枝取り」は、一般に考えられている「若楓の木(の) 下枝(を) 取り」の意ではなく、二つの目的語をもつ「若楓の木(を)、下枝(を) 取り」の意である可能性がある。また、34の「垣内柳、末摘み枯らし」も、「垣内柳(の)、末(を) 摘み枯らし」の意ではなく、「垣内柳(を)、末(を) 摘み枯らし」の意である可能性がある。前稿でそのように述べたのは、既出の3の「栄枝を、五百経る(を) 懸きて」や、12の「もむ楡を、五百枝(を) 剥ぎ垂れ」などと同様にⅠの構文に属する例である可能性が想定できるからである。ただし、3の「五百経る」と12の「五百枝」とは

もに数詞を含むのに対して、33の「下枝」と34の「末」はそれを含まない。数詞には副詞的な機能もあるから、3と12の表現がIの構文に属する例であるように見えるのはその副詞的な機能の故だ、と言えなくもないだろう。3と12の二例と同種の構文の例として33と34の二例をかけることには、実はそのような問題が伏在する。ただし、『日本書紀』の「賢宗天皇即位前紀」に見える名告りの表現のうち、

36 石上振之神櫓、伐本截末、市辺宮に天下治しし、天
いそのかみふるのかむすぎ もときりすえおしはらひ いちのへのみや あめのしたし
よろづくによろおしはのみこと みあなすゑ やつこ
 萬国萬押磐尊の御裔、僕らま。

という冒頭部分は、33と34の二例と類似する構文のものであり、Iの構文に属する表現である可能性がある。「石上振之神櫓」は、一般に「石上振の神櫓(の)」の意に解されているが、「石上振の神櫓(を)」の意ではないか。そうであれば、それを承ける「本(を)伐り末(を)截ひ」との関係で、Iの構文の例となる。

35の第一句の「天の川」は、注釈に「天の川で」「天の川に」「天の川を」などと口訳してある。これに対して、第一句・第二句の「天の川、夜船を漕ぎて」はIIの構文に属するものであり、「天の川(を)、夜船を漕ぎて」というような意味の表現ではないか、と前稿で述べた。その理由の一つは、「宇治川を、船(を)渡せをと」という14の例があるからである。もう一つの理由は、船を漕ぐ場所を

示すのに「を」を用いた「垂姫の浦を漕ぐ船(多流比女能宇良乎。許具不祢)」「(大・四四)や、島陰を漕ぎにし船の(之麻加枳乎。己枳尔之布祢乃)」「(三・四六四)などの例があることである。しかし、これも考えかたで結果は変わってくる。35の「天の川」は、七夕歌の第一句として単に場を設定するために提示したものであり、あえて「天の川(を)」の意だと限定する必要はない、といった意見も成り立たないではないからである。

5

たびたび言われることだが、上代語の「を」の用法には「に」のそれに通じる場合が少なからずある。

しかし、たとえば、「迎へ衰行かむ」〔記八〕と「拾ひ尔往かむ」〔七・二四七〕や、19の「しばしば君乎言問はじかも」と、20のすぐあとに例示した「吾妹児尔言問はましを」などでは、「を」と「に」との用法の間にどのような差異があったのか、よくわからない。さきに想定したように、「を」から「に」へという、単なる時代的な変化にすぎないのだろうか。また、

37 沫雪の庭に零り敷き 寒き夜乎 手枕まかず 一人かも寝
あわゆき
 む 庭に零り敷き 寒き夜乎 手枕まかず 一人かも寝
〔六・二六三〕

38 流らふる つま吹く風の 寒き夜尔 我が背の君は 独りか

寝らむ

〔二・五〕

の「寒き夜を……寝む」と「寒き夜に……寝らむ」との間には、何らかのニュアンスの違いがあつたのか。さらに、一般的な「…に恋ふ」に対して少数ながら「…を恋ふ」の確例があるが、それぞれの実例を比較しても両者の間にこれといった相違はないように見える。「悔しく妹乎別れ来にけり」〔五・三五四〕と「君尔別れむ日近くなりぬ」〔九・四三四七〕、「哭乎そ泣きつる」〔十四・三四八五〕と「啼尔も泣きつ」〔九・二八〇〕などの「を」「に」が、どのような違いにもとづくものかも明らかでない。

こうした「を」「に」の双方にかかわるものに、

- 39 あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下訪ひに
和賀登布伊毛袁 下泣きに 和賀那久都麻袁 今夜こそは 安
く肌触れ

〔記七六〕

という歌謡の表現がある。これの「下訪ひに吾が問ふ妹を」と「下泣きに吾が泣く妻を」は対句を構成しており、その前句と後句は並列的に「今夜こそは安く肌触れ」にかかる。対句の末尾にある二つの「を」は、詠嘆・感動を表すとも解されないではないが、「ヲは二の意であつて、末句の肌触れに係る」という注釈の解説もあるように、後世の「に」にあたる用法のものと解してよさそうである。

「…妹を」「…妻を」の「を」は、4の「大坂に遇ふや嬢子を道問へば」の「嬢子を」に同じく、「対象を表す格助詞」だと解説している注釈もある。

その「…妹を」「…妻を」は、確かに目的語として結句の「肌触れ」にかかる。そして、結句の「肌触れ」は、「手二も触れねば」〔四・五四〕や「吾妹児尔触るとは無しに」〔三・三三三〕などのように、助詞を用いる場合には「肌に触れ」となるはずのところである。39の「肌触れ」には、実際には「に」が用いられていないが、「肌」もまた「触れ」の目的語である。つまり、他動詞である「触れ」の目的語にあたるものに、「…妹を／…妻を」と「肌(に)」の二つがあるわけである。「肌」は「妹／妻」のそれだから、これは目的語を細説するⅠの構文の例である。

次の長歌はⅡの構文に属する例だと解されるが、表現がかなり複雑になっている。⁽⁶⁾

- 40 やそしまの 島の崎々 あり立てる 花橘乎 末枝尔 毛知
ひきかけ 仲枝尔 伊加流我懸 下枝尔 比米乎懸…

〔三・三三九〕

「花橘」に寄つてくる鳥などを捕獲するために、鳥籠を引き広げて配置し、媒鳥の「斑鳩」と「ひめ(鴿か)」を枝にとまらせるなどして、事前にさまざまな細工を行った。その細工の様子を具体的に写したのが、「末枝に籬(を)引き懸け、中枝に斑鳩(を)懸

け、下枝にひめを懸け」という六句にわたる表現である。細工を加える対象をまず「花橘を」と言つて提示し、続いて「…に鶺(を)引き懸け、…に斑鳩(を)懸け、…にひめを懸け」と上から下へ順に描写していく形式である。この文脈では、「花橘を」が、「末枝に鶺(を)引き懸け」と「中枝に斑鳩(を)懸け」と「下枝にひめを懸け」の三つの部分に対等にかかる。だから、「花橘を」と「鶺(を)」、「花橘を」と「斑鳩(を)」、「花橘を」と「ひめを」が、それぞれ二つの目的語にあたることになるだろう。三つの部分で二つの目的語を承けているのが、「引き懸け／懸け」という他動詞である。

前稿では、「花橘を」の「を」は「動作の対象を表す用法」のもの、つまり目的格を表す助詞だと解説している注釈に従つて、右のように述べた。しかし、多くの注釈では、これを感動・詠嘆を表すものだとして解している。また、特に「を」の用法を問題にせずに「花橘に」と口訳している注釈も、なかにはある。口訳を「花橘に」としたのは、ここの「を」は「に」に通じるものであり、対象を指示する用法のものだと見たうえでのことだろう。

40の「花橘を」は「花橘に」に同じだと解する場合、文脈・構文に対する理解が右とは異なってくる。つまり、その「に」は、あとに続く「末枝に…、中枝に…、下枝に…」という表現との関係で場所を指定するものとなる。「花橘」という場所を、以下に「末枝に…、中枝に…、下枝に…」という形式で三箇所に分けて提示したも

のだ、と見るべきことになるのである。「…に、…に、…に」という類似の構文には、次のような長歌の例がある。

41 天雲の 向伏す国の 武士と 言はるる人は 皇祖の 神の
御門外 外の重立 候ひ 内の重立 仕奉りて 玉葛
いや遠長く 祖の名も 継ぎ行くものと… (三・四三)
42 …念ひ延べ 見なざし山 八つ峯は 霞たなびき 谿辺
尔は 海石榴花咲き うら悲し… (九・四七七)

二首の最初の「…に」で提示した場所を、続く二つの「…に」に分けて具体的に提示したものである。

40の「花橘を」は「花橘に」の意だとする見解に従えば、この例は二つの目的語をもつ構文に属するものではなくなる。この見解は、「を」は感動・詠嘆を表すものだとする見解と同様に、結局は否定することができないものである。否定することができないというよりも、「花橘に」の意だと解する方が、以下に続く「末枝に鶺(を)引き懸け」「中枝に斑鳩(を)懸け」「下枝にひめを懸け」の三つの部分との関係から見て、より自然である。勿論、「花橘を」は目的格だとする見解もまた、完全に否定することができない。

I・IIの二種の構文が、以上のような韻文だけに認められるものではなく散文にも認められることを、前稿で述べた。しかし、実はその認定にも困難や問題が伴う。

『続日本紀』所載の宣命と『延喜式』所載の祝詞から、同構文の例かと思われるものを二つずつあげてみる。

43 朝廷を助け奉り仕奉る右大臣藤原朝臣左大臣
みかど つかへまつ みぎのおほまへつきみみかほらのあそまほひだりのおほまへつきみ
 位授賜比治賜。
のくらあつたまひをさめたまふ (四詔)

44 他戸王皇太子之位停賜却賜宣天皇が御命を、
をさへのおほまをひつぎのみこのくらとめたまひしけたまふとのりたま
 衆聞き食へと宣ふ。
もろみ (五四詔)

45 遠山近山に生ひ立てる大木小木乎本末打切弓、持ち参り来て、
すめまのみにこと みづ みあらか つかへまつ あめのみかげひのみかけ
 皇御孫命の瑞の御舎を仕奉りて、天御蔭日御蔭と隠れ坐して
ま

… (祈年祭)

46 大津辺に居る大船舳解放、舳解放、大海の原に押し放つ
おほつへ おほふねをへしきはなち ともしきはなちて おほみ
 事の如く… (六月晦大祓)

43の「右大臣藤原朝臣をば、左大臣の位授け賜ひ治め賜ふ」は、位階に関する通達である。これは、二つの目的語をもつ「右大臣藤原朝臣をば、左大臣の位(を)授け賜ひ…」という構文のように見える。しかし、末尾の「治め賜ふ」は、「そのように処理する」といった意味の敬語として、宣命の文末に置かれる複合語である。だから、「右大臣藤原朝臣をば」は意味的に文末の「治め賜ふ」に続くのであり、両部分の間にある「左大臣の位授け賜ひ」は、「治め賜ふ」の内容を「左大臣の位をお授けになる」というかたちで」と言つて具体的に説明したものだとも解しうるわけである。

44の「他戸王を、皇太子の位停め賜ひ却け賜ふ」の部分は、「他戸王を、皇太子の位(を)停め賜ひ…」という構文のものに見えなくもない。しかし、「却け賜ふ」は「…」というかたちで退けなさる」という意味の敬語だから、この例も、意味的には「他戸王を却け賜ふ」と続くものであり、間にある「皇太子の位停め賜ひ」は「却け賜ふ」の内容を具体的に説明したものだと解釈できる。

45の表現のうち「大木小木を本末打ち切りて」という部分だけを問題にすると、「大木小木を、本末(を)打ち切りて」というように、「打ち切りて」が二つの目的語をもつ構文になっているように見える。しかし、直後の「持ち参り来て…」をそれに続けて見ると、必ずしもそうとは言えなくなる。つまり、「大木小木を」は意味的に「持ち参り来て…」にかかるものであり、両部分の間にある「本末打ち切りて」は、「大木小木を持ち参り来て…」の状況を具体的に説明した表現である可能性が出てくる。

これに類似する祝詞の表現に、

47 天つ菅昔早、本茹り断ち末茹り切りて、八針に取り辟きて、
すがそを たつ すが 昔早、本茹り断ち末茹り切りて、八針に取り辟きて、
 天つ祝詞の太祝詞事宣れ。
のりとふかのりとこと (六月晦大祓)

というのがあつた。これの「本茹り断ち末茹り切りて」は、「天つ菅そを八針に取り辟きて」の状況を具体的に説明した挿入句的な表現だと思われる。「本茹り断ち末茹り切りて」を簡略にしたとも言え

るのが、45の「本末打ち切りて」であり、やはり挿入句的なものと見ることが出来る。

46の「大船を舳解き放ち、艫解き放ちて」の部分も、「大船を、舳(を)解き放ち、艫(を)解き放ちて」というような構文のものに見える。しかし、この部分に、直後の「大海の原に押し放つことの如く…」をつなげて考えると、事情は大きく異なってくる。ここは、意味的に「大船を大海の原に押し放つことの如く…」と続くのであり、「舳解き放ち、艫解き放ち」は「大船を大海の原に押し放つ」という行為の状況を具体的に説明した対句である可能性が出てくる。

次の「草の片葉をも言止めて」は「草の片葉をも、言(を)止めて」の意であり、二つの目的語をもつ構文に属する例だと認めてよいだろう【類例が「六月晦大祓」にもある】。

- 48 天つ御量を以ちて、事問ひし磐根、木の立ち、草乃可伎葉平毛言止^{やめて}、天降り賜ひし食す国天の下と、天つ日嗣知ろし食す皇御孫^{まみこと}の命の御殿を…
〔大殿祭〕

ここに用いられている「止めて」は、言うまでもなく「止めさせて」の意である。「止む」は下二段活用その他動詞である。これを四段活用の自動詞だと見れば、意味が通らない。やはり、第一の目的語だけに「を」が付いている。

祝詞に見える、二つの目的語をもつ構文の実例には、ほかに「天下大八島国を、事(を)避り奉りし時(天下大八嶋国^{たまくし}事避奉^よ之時)」「(出雲国造神賀詞)や「天の玉櫛を、事(を)依さし奉りて(天乃玉櫛^{たのみくし}事依奉^よ)」「(中臣寿詞)などがあるが、「譲る」の意の「事避る」も、「お与えになる」の意の「事依さす」も、既に無助詞のままで一体化していたかも知れない。

二つの目的語をもつ構文は、散文には確実な例がひどく少なく、それも祝詞に右の例があるにすぎない。同構文は、散文に用いられるべく韻文に用いられ易いものだったのかも知れない。

6

I・IIの二種の構文に属する例は、『古事記』『日本書紀』の歌謡にも『萬葉集』の比較的新しい時代の歌にも見える。したがって、当時の人々に、二種の構文を用いるのは回避したいという意識があったとは考えられない。ただし、『古今和歌集』には二種の構文に属する確例が一つも見えないから、これは上代語に特有の構文だった可能性が高い。

たびたび述べたとおり、二種の構文に属する実例では、第一の目的語だけに「を」が付き、第二の目的語が無助詞のままになっているのが普通である。その理由が問題になるが、第二の目的語に常に音数律上の制約が付きまといいたために「を」を用いなかった、

とも考えられない。

ところで、二種の構文に属する実例では、その表現主体にとってより重要な目的語は第一のそれではなく第二のそれだ、と一般的に言えるようである。具体的に言う、他動詞が表す行為・作用を直接に受けるのは第二の目的語であり、第一の目的語は行為・作用の及ぶ対象を前もって大まかに示すものにすぎない、ということである。

さきに列挙したもののなかからわかり易い例を取りあげ、そのことを確認する。たとえば、Ⅱの構文に属する4の「嬢子^{をとめ}を道^をを問へば」の場合、作者が「問ふ」という行為に出たのは、第二の目的語である「道」つまり「大坂」を越えるための近道を、どうしても知る必要があつたからである。第一の目的語である「嬢子^{をとめ}を」は、その情報の提供者として持ち出されたものにすぎない。だから、口訳としては、「嬢子^{をとめ}を」よりは「嬢子^{をとめ}に向かつて／嬢子^{をとめ}に対して」というような、大まかで間接的な意味の表現があてはまる。

同じくⅡの構文に属する6の「旅行く君を、袖^をを振らずして」でも、「振らずして」の直接の目的語は、第二の目的語である「袖^を」である。「旅ゆく君を」は、「振らずして」の対象となる人物を示すにすぎないものである。これも、「君に向かつて／君に対して」というような、間接的な意味の表現があたる。

Ⅰの構文に属する10の「避介の小坂を、道^をを行く者も」では、「道^を」は「避介の小坂」にあるそれをさすと考えられる。「行く」と

いう行為は、実際に第二の目的語としての「道^を」でなされるわけだが、その行為がなされる場所を前もって大まかに示したものが、第一の目的語である「避介の小坂」である。「避介の小坂のあたりを」とでもいった口訳がふさわしいだろう。

Ⅰの構文に属する11の「歳^{とし}の八年^{やとせ}を、斬髪^{きりかみ}の吾同子^{よちこ}を過ぎ、橘^{ほづえ}の末枝^{はつえ}を過ぐり」の場合、「歳^{とし}の八年^{やとせ}」という期間は、すぐに「斬髪^{きりかみ}の吾同子^{よちこ}」「橘^{ほづえ}の末枝^{はつえ}」が象徴する二つの期間に分けられ、細説されている。逆に言う、二つの部分が表す期間を合わせれば「歳^{とし}の八年^{やとせ}」という長い期間になる。「過ぎ／過ぐり」という動詞の直接の目的語は、この二つの比喩的な部分である。「歳^{とし}の八年^{やとせ}を」は、二つの部分が象徴する時期をひとまず大まかに示したものだから、「八年にわたって」とでも口訳すればわかりやすい。同種の用法の「を」に、

49 かにかくに年の六年^{むさせ}乎試み賜ひ使ひ賜ひて、此^{この}の皇后^{おほきさき}后位^{のくらゐ}を授け賜ふ。
〔七詔〕

という宣命の例がある。

このように、Ⅰ・Ⅱの構文では、他動詞の表す行為・作用が直接に及ぶのは第二の目的語であり、その行為・作用の及ぶ対象を前もって大まかに示すものが第一の目的語である、と一般的に言える。しかし、「を」の付いていない第二の目的語が、他動詞の表す行

為・作用を直接に受け、「を」の付いている第一の目的語が、その行為・作用の及ぶ対象を大まかに示す、というのはどうということなのか。

その疑問に答えるには、古い「を」の機能に注目する必要がある。さきに述べたとおり、上代語の「を」の用法は後世のそれに比べて多様だった。格助詞の用法に限っても、まったく同様のことが言える。既出の「迎へ衰行かむ」〔記八〕は勿論、

50 霞立つ 長き春日乎 かざせれど いやなつかしき 梅の花
かも
〔五・八四六〕

51 衣手の 名木の川辺乎 春雨に 吾立ち沾ると 家念ふらむ
か
〔九・二九六〕

52 天地と 相栄えむと 大宮乎 仕へ奉れば 貴く嬉しき
か
〔九・四七三〕

53 安波丘ろの 丘ろ田に生はる たはみづら 引かばぬるぬる
あ
吾乎言な絶え
こ
〔十・三〇二〕

54 此道鏡禪師、大臣禪師と位は授け奉る事を、諸聞食へと
の
宣る。
〔二・八四〕

55 朕一人を昇げ賜ひ治め賜へる厚恩 朕が世には酬い
あ
尽し奉る事難し。
あ
〔二・五四〕

などの「を」も、そうした例である。50の「長き春日を」の「を」

は、梅の花を「かざす」という動作の行われる時間を表すものと説明されている。また、51の「名木の川辺を」の「を」は、「立ち沾る」という動作の行われる空間を表すものだと言われる。時間を表す「を」と空間を表す「を」のどちらも、ほかにいくつか類例がある。ともに後世の目的格を表す格助詞よりは用法が広いが、確かに目的格を表すものと見て問題はない。

52の「大宮を仕へ奉れば」の「を」は、「仕へ奉れば」という行為の対象を示す格助詞で、「に」に通じる用法のものであろう。53は東歌だが、「吾を言な絶え」の「絶え」は自動詞だから、直訳すれば「私に対して、ことばが絶えないでほしい」というようになる。

「言勿絶行年」〔七・二六五〕その他の類似表現を見れば、自動詞を用いるのが普通だったようである。「吾を」の「を」は、「絶え」という事態が生じる対象を示す格助詞だと解してよいから、「私に対して」といった訳があたる。54の「此の道鏡禪師を」の「を」は、言うまでもなく人物をさしており、「にに対して」とでも訳しうるものである。しかし、「授け奉る」ものは「大臣禪師」の「位」である。55の「厚き恩をも」は、「厚い御恩に応じて／厚い御恩に対して」の意である。こちらの「を」は、人物をさすのではなく、表現主体が「酬い尽し奉る」という行為を向けようとする、相手によるかつての行為を表す。

上代語の「を」の例を、もう少し見てみる。⁽⁸⁾ いわゆる引用動詞が伴う「を」である。

- 56 八千矛の 神の命は 八島国 妻まきかねて 遠々し 高志の国に 賢し女乎 ありと聞かして 麗し女乎 ありと聞かしてさ 婚ひに あり立たし… (記三)
- 57 韓国鳴 如何に言ことそ 目頼子来る むかさくる 壹岐の渡を 目頼子来る (紀九)
- 58 蝦夷烏 一人 百闘ひと 人は言へども 抵抗もせず (紀二)
- 59 二上の をてもこのものに 網さして 我が待つ鷹乎 夢に告げつも (七・四三)
- 60 難波大宮に御 宇しし掛けまくも畏き天皇命の、汝の父藤原大臣の仕へ奉りける状乎婆、建内宿祢命の仕へ奉りける事と同じ事ぞと勅ひて、治め賜ひ慈び賜ひけり。 (三詔)
- 56の「賢し女をありと聞かして、麗し女をありと聞かして」という対句に用いられた「を」は、やはり後世のものとは用法が異なっている。「賢し女を―ありと」「麗し女を―ありと」という承接関係も、「賢し女を―聞かして」「麗し女を―聞かして」という承接関係も、現代語の表現から見れば不自然である。この「を」は一般の目的格の用法とは別であり、「…のことを／…について」とでもいった訳のあてはまる、漠然と対象を示す用法のものである。57の「韓国を如何に言ことそ」と、58の「蝦夷を」の「を」も同じで、

「韓国について／韓国のことを」「蝦夷について／蝦夷のことを」の意にとればわかりやすい。宣命の「塩焼等五人、人謀反すと告げたり」(十六詔)にも、同じ用法の「を」が見える。59の「我が待つ鷹を夢に告げつも」の「を」も、現代の用法から見れば特異なものである。「鷹を―告ぐ」という承接関係が、もともと無理なのである。「鷹のことを／鷹について」とでも訳さなければ、「夢に告げつも」という表現に順当には続かない。「何しかも、君がただか乎人の告げつる」(十三・三三〇四)という類例もある。60の「汝の父藤原大臣の仕へ奉りける状をば」は、「勅ひて」にかかる。「…状をば」は「…様子について」の意で、話題を大まかに提示する表現である。

以上、格助詞だと判断される「を」のうちでも現代のものと用法の異なる例を見てきた。どの例も、「石門乎聞」(三・二六)や「神乎齋祀而」(七・三三三)や「妹乎待南」(十二・六三〇)などの「を」のような、明確かつ限定的に目的語を指示する「を」ではなく、対象を広く間接的に示すものである。だから、以上の「を」をそのまま残して現代語に訳すと、意味のとれない表現になったり不自然な表現になったりする。【この種の「を」は、例は上代ほど多くはないが、中古の文献にも散見する】。

一般の動詞だけでなく引用動詞が伴う「を」にも、こうした用法のものが見られる。このことを確認すると、思いあたることがある。それは、「…に對して／…に向かつて」「…のあたりで」「…にわたつて」「…について」「…のことを」などの口訳があてはまる右のよ

うな「を」が、まさにⅠ・Ⅱの構文に含まれる、第一の目的語に付く「を」に一致するというものである。

ここで、ほぼ次のようなことが想定される。格助詞「を」は、行為・作用が直接に及ぶ目的語をこれといって狭く限定して指示するだけでなく、行為・作用が及ぶ対象をもっと広く大まかに示すことにも用いられていた時代があった。そのような古い時代には、行為・作用が及ぶ対象を広く大まかに示す「を」の使用頻度がずっと高かったし、Ⅰ・Ⅱの構文もずっと多く用いられていた。現代の我々が見ることのできる、Ⅰ・Ⅱの構文に属する実例には、古い用法の「を」が、第一の目的語に付く「を」として残っているのではないか。

格助詞「を」は、あるいは間投助詞に由来するとされ、あるいは感動詞に由来するとされる。また、格助詞から間投助詞が派生したとの見解もある。私見では、格助詞は間投助詞に由来するという説の可能性が最も高く、ほかの説の妥当性はかなり疑問だが、いずれにしても格助詞の用法とほかの用法との開きは小さくない。したがって、「を」が目的語を狭く限定する格助詞としての機能を獲得するまでは、その中間段階にいくつかの用法を派生したはずである。Ⅰ・Ⅱの構文に属する実例に、第一の目的語に付く「を」として用いられているのは、その中間段階に位置する、やや古いタイプの「を」だと考えられる。

もともと目的格の「を」は存在しなかった、という考えに従えば、

目的語は無助詞のままで提示するものだったろう。Ⅰ・Ⅱの構文に用いられる第二の目的語に「を」が付かないのも、その点では特に問題にならない。

注

(1) 佐伯曉子「平安時代から江戸時代における二重ヲ格について」『國語と國文學』二〇〇九年十一月。

(2) 「目的語を細説する上代語の構文」『佐保河を朝河渡り』の類「『國語國文』二〇〇七年十月」、「允恭記」歌謡の「臥やる臥やりも」―副詞句説は成り立つか―〔学習院大学人文科学研究所『人文』

6 (二〇〇八年三月)〕。これらの両論考を統合して書き直したものが、小著『上代の韻文と散文』(二〇〇九年、おうふう)の第Ⅱ部第三章である。

(3) 9の「古波陀嬢子を……相枕まく」は、前稿にあげていない。これの第三句・第四句の「雷の如聞えしかども」は、挿入句的な条件句だと解される。また、『萬葉集』にあるさまざまな類例から見て、「枕まく」は「古波陀嬢子の手」枕(を)まくの意である可能性が高いと判断される。この二点に基づいて、9はⅠの構文に属する例だと認定することが可能だろう。その結論に至る過程については、小編『古事記歌謡簡注』(二〇一〇年、おうふう)の補注Ⅳで述べた。

(4) Ⅱの構文に属する実例でも、前稿にあげなかったものが二例ある。

一つは、6と15に類似するという理由であげなかった、

a 海原の 意吉由久布祢遠 帰れとか 比礼布良斯家武 松浦
佐用姫 (五・七四)

という例である。これの第三句の「帰れとか」は、作者が「松浦佐

用姫」の意図を推測した挿入句的なものである。挿入句を除去した、第二句と第四句の「沖行く船を領巾振らしけむ」は、「沖行く船を、領巾(を)振らしけむ」というような構文のものである。「沖行く船を」は、「沖を漕いで行く船に向かって」の意である。

前稿にあげなかったもう一つは、右に17として引用した、

b 相念はぬ 妹哉本名 菅の根の 長春日乎 念晩牟

(十二・六四)

という例である。これを除外した理由は、「相念はぬ妹哉本名」の「を」が無表記になっており、それを読み添えなければならないものだからである。しかし、「相念はぬ人乎也本名」(四・六四)や「君乎曾母等奈」(九・四八)などの例を見れば、「を」の読み添えを行うべきものであることが明らかである。

第三句の「菅の根の」は「長き」にかかる枕詞だから、この例の表現や構文について考える際には、やはり除去してかまわない。枕詞を除去した「妹をやもとな、長き春日を念ひ暮らさむ」では、他動詞を含む第五句の「念ひ暮らさむ」が「妹をや」と「長き春日を」の二つの目的語を承けている。これは、多数の例がある「妹を思ふ」という表現と「長き春日乎念ひ暮らさく」(十一・九三)という表現とを一つに統合したような形式になっている。「長き春日乎かざせれど」(五・八四)や「雨の降る日乎鳥狩すと」(七・四二)などの「を」と同様に、17の「長き春日を」の「を」は、動作の行われる時を表す格助詞だと説明されている。

(5) 『萬葉集』の例を見ると、27の「裾引く」と同様に、10の「道行く」も一体化していたかと疑われる。しかし、『日本書紀』の歌謡に用いられているこの「道行く」はより古いものだろうから、既に一体化していたかどうかについては判断が困難である。

(6) 40の長歌は、その内容から見て、もとは社会の状況を風刺する童謡

謡だったろうと推測されている。問題の「花橘を末枝に纏(を)引き懸け、中枝に斑鳩(を)懸け、下枝にひめを懸け」の部分について、ここに詠み込まれている二種の鳥は冬鳥だから夏の「花橘」とは季節が合わない、という指摘がくり返しなされている。そのような不一致は、同歌が寓意のある童謡だったために特に問題にならなかったのではないかと、とも言われる。

(7) 実は、第二の目的語にも「を」が付く例が、まだある。それは、13の「寝を」と17の「長き春日を」である。13の「寝を」は第一句の「根を」と掛けたものだから、「を」はどうしても必要だったろう。17の「長き春日を」については、例外となった理由がわからない。

(8) 58の歌謡の第三句は、一般に「百人」と解されている。これを「百人闕」との意だと解するのは、『古野雅雄博士記念古事記・日本書紀論究』(二〇〇二年、おうふう)所収の小稿「毗儀利毛毛那比苔」(紀一一)の別解で述べた私見による。「一人」と「百人」とをただ並べるだけでは「一人の武力が百人のそれに相当する(ほどに勇猛だ)」の意になりがたく、また、このような文脈で引用の助詞「と」が用いられないのは古い歌謡の表現としても例外的である。以上の二点にもとづき、「毛毛那比苔」は「百人闕ひと」とあるいは「百の闕ひと」が縮約した「百人闕」との意だと解した。この私見は、のちに小著『上代語構文論』(二〇〇三年、武蔵野書院)の第Ⅲ部第一章としてまとめた。

ENGLISH SUMMARY

The Syntax of Early Old Japanese Including Two Objects

SASAKI Takashi

The so-called “double-*wo* construction,” in which one transitive verb has two objects, has been the subject of intensive investigation and discussion. However, studies so far have focused mainly on the relevant construction from the Heian period to the modern period, and little research has been done on ancient literature such as the *Kojiki*, *Nihon Shoki*, and *Manyōshū*; consequently, its characteristics have yet to be fully illuminated.

To fill in this gap, this paper thoroughly examines ancient texts and discusses many examples to illustrate that, in Early Old Japanese, only the first of two objects in a double-*wo* sentence has the particle “*wo*,” while the second object lacks this particle. Accordingly, the name “double-*wo* construction” is unsuitable in the case of Early Old Japanese. Although some of the examples in question are apparently difficult to categorize as having “double objects”, this paper tries to show that they are really not problematic by giving closer examination of individual cases. Furthermore, it also provides many examples and the author’s point of view regarding the relationship between the particles “*wo*” and “*ni*” which appear in some “double object” sentences.

Key Words: Early Old Japanese, double-*wo* construction, object, particle “*wo*,” semantic unification